



長谷寺に伝わる赤・青・緑鬼の意味

奈良県の長谷寺で赤鬼・青鬼・緑鬼が出現する「だだおし」法要が、2023年2月14日に3年ぶりに一般の参列を可能として開催された。だだおしは、修二会（しゅにえ）の最終日に締めとして行われる鬼追いの儀式で、大和に春を呼び、無病息災・厄除け開運を祈願する追儺会（ついなえ）法要である。鬼は、人間の煩惱や災厄・禍を象徴している。

この法要は、千年以上前から伝わる奈良の二大「火祭り」の一つで、開山徳道上人が閻魔大王より授かったとされる「檀拏印（だんだいん）：別名、牛玉宝印（ごおうほういん）」を参拝者の額に押すことや、僧侶がダダダと走る行道から、「だだおし」と呼ばれる。

檀拏印を押した牛玉札（ごおうふだ）の法力で追い出された青鬼・緑鬼・赤鬼が、燃え盛る重さ150kgもの巨大な松明を持って本堂の周りをのたうち回る。青鬼は、角が3本で人間の煩惱の怒りを、緑鬼は、角が2本で不摂生を象徴している。

青鬼と緑鬼が大暴れした後、最後に一番大きな面の赤鬼が登場する。赤鬼は、煩惱の貪欲を象徴し、一番大きな面であることから、赤鬼が鬼の親分であることが暗示されている。

（吉村耕治）

●日本の青～藍の色に魅了されて

5年くらいの間で日本を打ち出した展覧会特に葛飾北斎や歌川広重などの浮世絵版画、そして最近では、より研究が重ねられている川瀬巴水、吉田博他作家の新版画の展覧会などがテーマや切り口を変えて増えている。

空、水、山にも青、「藍」が多く使われ、「藍」一色の作品も着目されて、人々の心を癒すことに効果がみられるのか、澄んだ色で取り上げられることが少なくない。

数年前に静岡市東海道広重美術館で「藍」などを使った東海道五十三次シリーズの風景版画や、そこから近くの静岡・由比の正雪紺屋（兵学者の由井正雪の生家）にて藍染の暖簾が架かった紺屋のガラス戸越しの「藍甕」を見た。当時の紺屋の建物は、まるでタイムスリップをしたかのようなのである。

2021年に公開された「HOKUSAI」の映画で晩年の北斎が当時の高価な「ベロ藍（ブルシャンブルー）」に降り注がれ、体全体を流れ落ちる「ベロ藍」の印象的なシーンは、当時の北斎の心情がよく再現されている。貴重な比較的鮮やかな青の表現可能な優れもの、「ベロ藍」は、当時の藍摺のとても力強い立役者といわれ、作品は私達に今もなお美しく鮮明に原風景を魅せてくれている。（瀧川優子）

●大辞泉ひろいよみ 8 ーい

入れ墨・文身・刺青：皮膚に、針・骨片・小刀などで傷をつけ、墨汁などを入れて文字や絵画などを描くこと。また、そのもの。酸化鉄・朱などを入れて着色もする。

色：光の波長の違い（色相）によって目の受ける種々の感じ。原色のほか、それらの中間色があり、また、明るさ（明度）や鮮やかさ（彩度）によっても異なって感じる。色彩。人の肌の色。人の顔の色つや。表情としての顔色。それらしい態度・そぶり。種・種類。華やかさ。華美。音・声などの響き。調子。情事。色事。古代・中世、位階によって定められた衣服の色。喪服のねずみ色。にび色。婚礼や葬式のとき上に着る白衣。人情。情愛。好色なさま。

色の類語：色彩・色調・色相・色あい・色目・彩り・あや・彩色・カラー。

色改まる：喪が明けて、喪服からふだんの衣服に着替える。

色濃い：ある傾向が強く現れている。衣服の色が濃い。しつこい。どぎつい。

色の白いは七難隠す：肌の色が白ければ、少しくらいの欠点は隠れて、美しく見える。

色に出（い）ず：心の中の思いが表情や態度に現れる。色がつく。（永田泰弘）